

Route Navigation

《私の進路選択》

第12弾は、体育科担当の及川先生です。進路選択原稿の中で最も長編の文章です。

「もしもし、及川さんですか？A高校野球部顧問の〇〇ですが…」

私は小学校から野球を始め、将来の夢はプロ野球選手という、典型的な野球少年でした。中学時代は野球のクラブチームに所属をし、さほど目立った成績を残せず、中学三年生の夏に引退をしました。そんな私のもとに、野球に力を入れている私立高校の監督から直々に「ぜひ本校に入学して頂き、共に甲子園を目指して頑張ってもらいたい」という勧誘の電話がありました。それは中学三年生の秋のことです。

「テレビ越しでだけれど見たことのある、甲子園のベンチから鬼の形相で選手にゲキをとばしている、あの監督のお眼鏡にかなったんだ」当時の及川少年にはとても意外な出来事でした。その電話があるまでは、自宅から

一番近い公立高校を受検し、自分が満足できる程度に野球がやればいいのかと思っていた及川少年は、その電話を境に大きな悩みを抱えることになります。

電話があって以降、及川少年の心の中は「A高校の野球部はプロ野球選手も多く輩出しているし、甲子園に行ける。絶対A高校に行って野球をやるぞ」という思いで一色でした。勉強するために握りしめていた鉛筆と消しゴムを捨て、バットとグローブ、ボールを握る日々が続きました。そんなある日、当時の担任が私に「お前に3つ質問をする。一生野球だけで生きていく覚悟があるのか？万が一大きなケガをして野球ができない体になったらどうする？もし野球が嫌いになって、逃げ出したくなったらどうする？答えは明日でいい。ただし適当に考えるな。」という質問をしてきました。「先生は何で訳の分からない質問をしてくるのだろう。一生野球だけで生きていくし、ケガをしても野球に携わる方法はいくらだってあるし、そもそも野球が嫌いになるわけじゃない」質問をされて瞬時にそう思い、そのままの答えを翌日先生に言いました。すると先生は「いいか。今から俺の昔話をする。俺はこう見えて大学時代にハンドボールで国体に出場した。一生ハンドボールで生きていくつもりだった。国体の後、実業団から誘いがあっ



て飛びつくようにしてそのチームに入った。けれど、入った瞬間から地獄だった。それまで経験したことのない辛い練習で体はボロボロになり、日常生活もままならないような全治一年の大ケガをした。その時に会社から言われたんだよ。お前はハンドボールができるからうちの会社にいられる。できないなら、去ってくれ。」結局、先生はケガが原因で職を失い、日常生活に支障がでるくらいの辛い思いをし、大好きだったハンドボールが嫌いになり路頭に迷ったようだ。

先生の言葉を聞いた及川少年は悩みました。「野球がしたい。けれど、ケガは今まで何回もしてきた。今後大きなケガをしたらどうしよう…」その時先生が続けて言葉をかけてくれました。「おい及川、お前は野球がしたいのか？それとも野球もしたいのか？」「…。」「甲子園に出るような学校でも野球以外のことも経験できる。けれど、生活の大部分が野球で独占されてしまうために、野球以外のことに打ち込むことは難しい。それくらいの意気込みでないと甲子園を目指すことはできない。一方、お前がかつて第一志望に挙げていた公立高校は野球もできるし、野球をしながらそれ以外のことに打ち込むこともできる。残り一ヶ月で親も含めてよく考えてこい。」

2学期の懇談会で、及川少年は先生に「公立高校を受検したいです。公立高校に入学して、強い私立高校を倒します！大好きな野球をしながら自分の可能性も広げてみたいです。」そう決意をして公立高校を受検しました。

あの時に私立高校の野球部に入っていたら、今頃みなさんとは出会わなかったかもしれません。違う仕事をしていたかもしれません。私立高校に進学をせず、公立高校を選択したことが正解だったのか、不正解だったのかは正直今も答えが出ていません。しかし、一つだけ明確なことは、自分で行った進路選択に後悔をしていないということです。それまでの15年間の人生の中において、自分で自分のことをこんなにも考え、見つめたことはありませんでした。

今、みなさんの中にも、進路選択で悩んでいる人はいると思います。大いに悩んでください。自分の一度きりの人生です。レストランでAランチにするのかBランチにするのかを選択することとは訳が違います。あなたの一生がかかってきます。進学後の3年間、更にもその先のこともイメージしながら進路選択をしていけるといいですね。

3年生職員の進路選択の体験やみなさんへの思いを紹介してきましたが、いかがでしたか？ケースは違えど、いろいろと悩んだり、不安を抱えたりして進路選択をしてきたことが分かると思います。

進路決定を間近に控えたみなさんは、これまでに経験したことのない不安や焦りを感じているかもしれません。そんな時、人生の先輩として少しでも力になることができれば幸いです。

最後になりましたが、クオリティーの高いイラストを描いてくれた生徒のみなさん、本当にありがとうございました。